

**林崎掘割（はやしざきほりわり）と野々池**

江戸時代前期の明暦3年(1657)、干ばつに苦しむ村人が明石川の上流から明南町の野々池(明石南高校の北側)までの約5.4キロの掘割(地面を掘って水を通した所)を約1年で完成させました。『明石のため池』(平成20年3月明石市教育委員会)では、

林崎地方は、印南野台地の東端にあって、砂礫層のためにため池があっても常に水不足に悩まされていました。そこで、林崎六か村(和坂・鳥羽・林・東松江・西松江・藤江)の庄屋達は灌漑用水をどのように確保するか相談し、明石川から取水し掘割を通して野々池に貯水することを計画し、明石藩第5代藩主松平忠国に許可を願い出、認められました。溝幅1.5メートル、長さ5,374メートルの工事を明暦3年10月に起こし、翌万治元年(1658)4月に完成させました。この工事の様子を後世に伝えるために、野々池の脇に記念碑である「林崎掘割渠記碑(きよきひ)」(明石市文化財)が、元文4年(1737)に建てられています。現在も毎年4月18日に記念碑前で「掘割祭」が開かれており、貴重な文化遺産が次代へと引き継がれているそうです。

灌漑期(田植えから秋の収穫前まで)の川の水は、川筋の村で利用するため、農閑期の冬の間のため池に水を入れ溜めることが基本原則とされていました。明石では、川の水を引くためにつくられる水路を「掘割」と呼んでいます。林崎掘割、大久保掘割(林崎掘割を延長)、庄内掘割(瀬戸川から取水)などがそれにあたります。林崎掘割は江戸時代前期の早い時期に作られた代表的な掘割で、明石川の上流、平野村黒田(現神戸市西区平野町)に伏樋を設け取水し、西戸田、印路、中村の山裾をたどって野々池に貯水しています。右下地図は、明石市の小学校の社会科教材ともなっています。

野々池から、掘割を遡って行くと、水路が、山裾や竹藪の中を通り、集落の中を通っています。集落では水路に降りる石段もあり、その水を洗い物などに使っていたことがうかがえます。「乳女郎大明神」と呼ばれる祠も水路脇にあり信仰されています。掘割は、高低差の余りない地形を巧みに掘られており、上流から下流へと自然流下しています。この工事の測量を行ったのは、和坂村に住んでいた工師山崎宗左衛門で、毎夜12時から翌朝4時まで提灯を持った人を並べ、光の並び具合で土地の高低などを調査したといわれています。提灯などを使って測量したという話は、江戸前期、明暦元年(1655)の加古川下流の新井(しんゆ)用水の開削(姫路藩古宮組大庄屋の今里傳兵衛が計画 現加古川大堰～播磨町古宮大池)においてもあります。

**○掘割などが作られる背景：新田開発による用水不足**

江戸時代前期、明石藩5代藩主の松平忠国は、慶安2年(1649)8月に、丹波篠山から明石藩に入封しました。すぐに松陰新田(明石北高校の南付近)を開きました。そのために9つのため池を作って開墾させたといわれています。続いて、林崎掘割を作りました。林崎掘割は、砂礫層のためにため池があっても常に水不足である林崎地方を潤すためつくったといわれていますが、一番の水不足の原因は、村々で新田を開発していったために水不足が生じていることにあります。また、今後さらに新田開発を進めるためにも水を確保する必要がありました。

江戸前期は、明石藩に限らず、姫路藩においても新田開発が進められていました。その結果、新しい村が印南野台地(現稲美町)にも生まれます。その代表的な村が加古新村です。もともと台地上は水が乏しく水田開発は難しい所でしたが、ため池を築造することによって開発が進められます。しかし、天水(雨水)だけでは用水は不足するために、遠く離れた川から水を引いて大きなため池に貯水するようになります。ただし、その川の下流では、すでにその水を使って水田耕作が行われているために、水を引く時期は、紛争をさけるために、非灌漑期に限定されることになります。加古新村の新田開発を推進できたのは、延宝8年(1680)、加古川の支流の草谷川から、約4キロに及ぶ「加古大溝(かこおみぞ)」を引き、非灌漑期(秋から春)に巨大な「加古大池」に貯水できたからです。(参考『兵庫県加古土地改良区誌』平成7年5月発行)

また、同一の藩内の村間で紛争が生じても藩主(領主)が同一領内での紛争の調停ができたことにあります。林崎掘割の創設においても明石川下流の村々は明石藩領で、林崎地方の村々の領主も明石藩主です。草谷川の下流の村々は姫路藩領であり、開発を進める加古新村の領主も姫路藩主でした。領主が異なる場合、その調整が極めて難しい状況が、多くの領主が入り乱れる江戸時代中後期の加古川中流域などで見られました。



左  
加古大池  
中  
加古大溝  
右  
草谷川

